出雲を原郷とする人たち

岡本　雅享

□62■

越後・佐渡国（13）

沿岸に残る大国主の伝説

鬼と岩投げで力比べ

越中（富山）・越後（新潟）両国の境を流れる境川。かつて神流と呼ばれたこの川を、越中の海岸沿いから渡って越後の旧頸城郡内に入ると、間もなく北陸街道最大の難所とされた親不知（新潟県糸魚川市）に至る。15キロにわたる断崖絶壁の天険は、海岸までせり出した飛騨山脈の北端が海になだれ落ちてできた。今のJR市振―親不知間の海岸が親不知、親不知―青海間が子不知と呼ばれた。

この天険は、荒波と相まって古から旅人を悩ませてきた。明治16（1883）年に山腹の道路が開削されるまで、人々は絶壁が間近に迫る波打ち際を、洞穴や崖の切れ込みに避難しながら、波間をぬって通り抜けたという。その危険な波打ち際ではわが身を守るのが精いっぱいで、親は子を忘れ、子も親を顧みられないことから「親知らず子知らず」の名がついたとも伝わる。

2010年初秋、2度目の越後入りで宿泊した親不知観光ホテルは、親つけない、岩礁の多い海不知の中でも最大の難所だった。安政2（1855）年の皇国総海岸図は「親不知難所」「此辺ノ海瀬スベテ荒磯船繋カタシ、九月ヨリ三月マデ漁舟ノ外渡廻船ナシ」と記す。この海を、出雲や能登から来た海民たちは航行したのだ。

そんな親不知と子不知の間にあって、ひときわ海に張り出した砂浜が、親不知ビアパークがある外波の浜だ。その浜からは、隣接する歌集落の海上（北東の沖合）に浮かぶ、二つに割れたような大岩がよく見える。大国主（出雲大神）の伝説がまつわる「投げ岩」だ。

その昔、ここを通りかかった大国主は、踊りがうまくて美しい歌の綾姫が、裏山に住む鬼に求婚され難儀していると聞き、鬼に岩投げの力比べを挑む。鬼は大岩を抱き上げて、海岸の渚まで投げ飛ばした。それを見た大国主がもっと大きな岩を持ち上げて投げると、なんと渚を飛び越えて海の中に落ち、二つに割れた。負けた鬼は悔しがり、自分が投げた岩を蹴飛ばして姿を消したという。

その時、鬼が蹴った足跡があるという「鬼蹴り岩」は今、海上に突き出た北陸自動車道、それと並ぶ国道8号の高架の下になって目立たないが、大正2（1913）年の『親不知案内記』には、松の大樹を乗せた巨大な大岩が波打ち際に座す姿が写っている。昭和50年ごろまでは見事な老松が根をはり、沖合の投げ岩と相まって「親不知の代表的な景勝」だったと、青海町『ふるさとの歴史』第9集（1989年）は記す。

越後西部の沿岸地域には、出雲大神の伝説が随所に残っている。能生の布引には舟繋という舟の形をしたくぼ地があって、そこは昔、大国主らが沖合へ往来した舟を置いた所だという。能生川河口に近い、布引グラウンドがある今の糸魚川市太平寺あたりだ。

また同じ旧能生町筒石の海上に浮かぶ千束島は、大国主が立ち寄った島だという。平たく大きなその島の形は、今は平島と呼ばれる出雲の気多崎を思い起こさせる。大国主がここで足を洗ったため洗足島とも呼ばれたという千束島の岩の中央には、大国主が休んだ際に掘った井戸の跡があり、海中の岩島にもかかわらず淡水が湧き出たという。これらは昭和11（1936）年の『西頸城郡郷土誌稿・口碑伝説編』が収める伝説の一部だ。

太平寺は、大己貴（出雲大神）を祭る能生白山神社の別当寺があった所。千束島を挟んで海岸沿いに鎮座する能生の藤崎神社、名立の江野神社も、大己貴を祀る出雲系の古社だ。能生川をさかのぼった平には大神社、名立川河口をさかのぼった丸田には円田神社と、やはり大己貴を祀る式内社がある。

この一帯はほぼ、10世紀前半の和名抄が頸城郡の筆頭に記す沼川郷にあたる。同郷の産土神は、出雲国風土記や古事記が出雲大神と結ばれたとする高志の国の女神、奴奈川姫だ。JR糸魚川駅に立つその女神像の横には「出雲の大国主命は、はるばる越の奴奈川姫とヒスイを求めに来た」と記す案内板がある。糸魚川は、随所で出雲を感じられる土地だ。

（福岡県立大准教授）

＝次回は10月16日に掲載＝

親不知海岸。断崖上に見えるのが親不知観光ホテル＝尾崎毅さん（同ホテル代表）撮影・提供

JR糸魚川駅前に立つヌナカワヒメの像

海上に浮かぶ投げ岩